学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第 5 回訪日の記録とした。以下ではその一部を紹介する。

日付：10 月 19 日 (月)　1 日目
大学名：北京化工大学
氏名：彭立宇

日本での第一日目はほとんど移動でゆられっぱなしだった。飛行機、船、バスと次々に乗り換えたが、誰もが興奮していた。外国に来てその土地の風土や人情に触れられるという機会はめったにあるものではない。大阪の土を踏んで最も強い印象を受けたのは、大阪人の懸命に仕事をする姿だった。日本航空の飛行機では、どのスタッフも乗り込む乗客に対し笑顔で挨拶していた。こうした笑顔で迎えられると、相手の真心がこちらにも伝わってくる。笑顔が自分の職業に対する誠実な気持ちからではなくて、うわべだけのものだったら真心は伝わらないだろう。

空港でちょっとしたハプニングがあった。通関に手間取り船に乗る時間が迫っていた。急いで埠頭に向かったが、突然、陳夢君さんがいないことに気づいた。そこで僕とガイドの呂純明さんが空港に引き返して捜すことになったが、果たして捜しだせるかどうか、自信がなかった。空港はあんなに広いし、不案内だ。こうした状況のなかで人一人を捜し出すのは容易なことではない。しかし、空港に引き返してみると、多分僕たちが人を探しているのがわかったのだろう、慌てた様子の空港スタッフが私たちのところへ来て迷子になっている人がいると告げた。果たして陳さんだった。それからいろいろとあったが、とうとう陳さんと落ち合うことができ、僕たちは埠頭に向かった。陳さんにはぐれてしまったわけを訊いてみると、飛行機に揺られて気分が悪くなったのと日本の気候に慣れないのとで、空港のトイレで時間をくってしまい、トイレから出たときには皆がいなくなっていた。そこで空港のスタッフに助けを求め、代表団を探してもらったところ、僕たちと会うことができたということだった。タクシーで埠頭に向かったが、タクシーの運転手は僕たちが船に間に合うかどうか心配しているのを知ると、道中ずっと大丈夫だと慰めてくれた。結局、船には間に合った。幸い事なきを得たが、これも空港のスタッフとタクシーの運転手のおかげだ。彼たちの仕事に対する情熱と全て相手の身になって考えるという精神のおかげで大事にいたらずにすんだ。あの空港スタッフの慌てた顔と道中ずっと慰めてくれた運転手の顔が脳裏に浮かぶ。今日は日本での一日目だ。まだ始まったばかりだ。これからの数日間、僕はもっといろいろなことを学ぶことになるだろう。

日付：10 月 19 日 (月)　1 日目
大学名：北京化工大学
氏名：陳夢君

訪日一日目を決まりきった「興奮」という言葉で形容したくはないが、今日は確かに普通では経験できないようなことを経験した。

羨ましげなクラスメイトたちに見送られ、しかも初めて飛行機に乗るので興奮していた。確かにクラスメイトが言っていたように、飛行機が離陸するとき耳に不快感があったが、その後は思ったよりも快適だった。JAL の日韓式食事は食器が上等でおいしかった。心のこもったサービスはいつまでも乗って

いたくなるほどだった。

ところが、飛行機がもうすぐ着陸するという段になって乱気流に巻き込まれ、飛行機が揺れ始めた。初めての経験で恐ろしさのあまり、気持ち悪くなってきた。おそらく胃病がまた起こったのだろう。ますます強くなる吐き気の中で日本人のやさしさに触れることができた。

私は先生についてきてもらってトイレの長い列に並んだ。前の女性はすでに長い時間待っているようだった。これでは私の番になったとき、トイレは使用禁止になってしまうのではないか心配になった。真っ青な私の顔を見てキャビンアテンダントが心配して袋を持ってきてくれた。前に並んでいた二人がカタコトの中国語で「お先にどうぞ」と言ってくれた。あまりに気分が悪くてお礼の言葉も言えなかったが、心になんとも言えない温かいものが広がった。このような人に親切にする光景は中国でもよく見るが、異国の人のぬくもりが感じられた。トイレから出ると、見知らぬ乗客が日本語で大丈夫かと訊いてくれたが、私はお辞儀をする以外、どう応えていいものやら分からなかった。

飛行機を降りても胃がむかむかしていた。トランク、バッグ、パスポートなどの証明書をクラスメイトに預け、またトイレに行った。トイレから出てみると、空港ロビーにいるはずのみんながいない。携帯もパスポートもなく、連絡のしようがない。日程もすっかり忘れてしまっている。連絡をとる方法が全くない。私はジェスチャーを交えながら、英語と片言の日本語で空港スタッフに事情を説明した。状況を理解した空港職員が私よりも焦っている様子を見て、また心に温かいものを感じた。そのおかげで絶望的な状況にあっても、私は冷静さを保つことができていた。ほとんどスタッフ総動員という状況になった。フライトナンバーは？――覚えていない。ゲートナンバーは？――覚えていない。目的地は？――よく説明できない。パスポートは？――手元にない。私を助けてくれようとしている人たちの顔が曇った。が、こうした状況に焦りながらも、冷静にどうしたらよいかを考えてくれた。彼女たちの言うことは少しか理解できなかったが、彼女たちの焦りや責任感は伝わってきた。あるスタッフが私の話を聞きながら一緒に方々捜し回り、他のスタッフが団と連絡をとってくれているので心配ないと言ってくれた。パスポートがないので空港から出ることができないと説明され、そのための手続きを手伝ってくれた。同じように慌てて私を探しに来たクラスメイトと先生と再会すると、彼女はホッとしたように笑顔になった。今もあの笑顔をどう表現したらいいか分からないでいる。安心？嬉しい？安堵？どれも違うような気がする。それは多分、自分の責任を果たしたことで出た笑顔だったのではないか。時間がなかったので、大きな声で「どうもありがとうございました」と言うことしかできなかったが、彼女は笑顔で私を見送ってくれた。

今日はとんだ目にあったが、充実した一日だった。体調は悪いが、心は温かい。日本は初めてだが、日本人の礼儀正しさ、仕事に対する責任感、すばらしい仕事の分業体制、私はこの「礼儀の国」が好きになり始めている。旅はまだ始まったばかりだ。明日からまたどんなことが起こるか分からない。疲れたけれども日本にありがとう！

日付：10 月 19 日（月）1 日目

大学名：北京語言大学

氏名：臧楠

朝、興奮して目が早く醒めた。窓を開けて新鮮な空気を吸う。やる気が身体にみなぎってくるのを感じた。今日は待ちに待った日本へ行く日だ。

首都国際空港に着いたのは 11 時だった。何やかにやと手続きがあり 13：15 分に飛行機に搭乗した。

日本航空の客室乗務員が親切に手荷物を棚に載せてくれたり、シートベルトを点検してくれたりした。まもなく飛行機が離陸した。国際線のサービスを受けるのは初めてだったし、生の日本語を聞くのも初めてだった。日本語は普段は学生同士で話すだけなので敬語はあまり使わない。だから敬語が苦手だ。が、今日は乗務員のサービスで身近に敬語を聞き、いろいろと敬語の使い方を学ぶことができた。

アッという間に大阪関西国際空港に到着した。通関手続きをしているときに感じたことは、空港のどの部門も仕事をてきぱきとこなし、規律正しく、仕事の効率が高いということだった。ほんの十数分間で手続きは終了した。続いて船に乗るためにバスで神戸港の埠頭に向かった。バスから神戸港に下りた立った瞬間、本当に日本に着いたことを実感した。潮風に顔をなでられ、いい気持ちだった。一日の旅の疲れが吹っ飛んだ。日本六番目の大都市の息吹を感じた。

日本での最初の食事はビュッフェだった。食事の後、レストランの外に出て美しい景観を堪能した。呂先生の話によれば、ここは神戸で最も美しい場所だということだったが、それは本当だった。岸辺に立って見た神戸の夜景は本当にきれいだった。輝くネオンに大観覧車、どれもすばらしかった。

宿泊はクラウンプラザ神戸が用意されていた。ホテルに向かう途中、たくさんの駐車場が立体駐車場になっているのに気づいた。呂先生から前に日本には場所を節約するために立体駐車場があると教わったが、今回実際にそれを見て、日本人の創造力に感心した。

ホテルに着いた。訪問団のためにこんなに快適な部屋を手配してくれてとてもありがたかった。初めてウオシュレットのついたトイレを体験したが、日本人の生活の質の高さに驚いた。

今日は移動だけの日程だけだったが、人生初という体験をいろいろした。日本人の仕事に対する情熱、真剣な態度、慎重さが印象的だった。旅はまだ始まったばかりだ。明日はどんな収穫があるのだろうか。明日もきっと人生の宝になるような収穫があるだろう。

日付：10 月 20 日 (火)　2 日目
大学名：北京化工大学
氏名：趙立薇

今日は中華街、人と防災未来センター、それと有名なワコールの 3 ヵ所を見学した。スケジュールが詰まっていたので、お昼は車中でお弁当を食べた。疲れたが、誰もが元気一杯、写真を撮ったり、おしゃべりをするのに忙しかった。夜の中日大学生親睦会は食事をする時間ももったいないほど楽しかった。忙しい一日が 8：30 に終了した。今日は 3 つの重要な活動について記録する。

(1) 人と防災未来センターでは、ボランティアの人に連れられて地震の全過程を見学した。それは音と光学技術を駆使した真に迫るものだった。全過程を見終わって、人がちっぽけな存在でしかないことと自然の威力を思い知らされた。大型重機を使って数年或いは数十年かかって建設した高架、鉄道、家屋が一瞬のうちに崩れ落ちた。たった数秒の間に……。人に考える時間も与えないままに……。悪魔のような地震が子供にも襲いかかった。振動音、目の前に迫る画面、私の手を握る友だちの手がだんだんきつくなっていった。本当に怖がっているのだ。被災現場の人々がどんなに恐ろしい思いをしていたか、想像すらできないけれども、被災後の映像を見る限り、人々は泣いてはいたが、絶望してはいなかった。被災者は家をなくしたが、孤軍奮闘しているというわけではなかった。死者の数はどんどん増えていったが、生きている子どもたちに勇気づけられた。多くのボランティアを見て心が温かくなった。人を思う気持ちに国境がないことを悟った。

久保さんの説明で、例えば地震の前兆やいかに地震に備えるかなど、地震について多くを学ぶことが

できた。彼が四川の被災民の支援に駆けつけたことを聞いて感動した。久保さんは最後に魯迅の「度尽劫波兄弟在　相逢一笑泯恩仇(劫波を度(わた)り尽くして兄弟在り　相逢(あ)いて一笑すれば恩仇泯(ほろ)ばん」(訳注：人間、あるいは民族同士の誤解、憎しみを解いてくれるのも時間である)という詩を引用して解説を終えた。私は善良な中国国民が広い心で世界を包みこみ、世界中の人々もそうあってほしいと心から願った。なぜなら愛に国境はないのだから。

(2) ワコールで最も印象的だったのは「人にやさしい」ということとその規律正しさだった。ワコールは女性一人ひとりをより美しく、より健康的にすることを目指し、しかもそれを実践している。4歳から74歳まで、それぞれの年齢に合った服のデザインだけでなく、人種・地域・体型的特徴の違いに基づいた下着のデザインを行っている。また、さまざまなシーンのデザインも女性への細かな配慮が感じられた。何千人もの従業員がいるが、閑そうにしている人などなく、誰もが懸命に静かに仕事をしていた。「人にやさしい」、規律正しいワコールの企業文化が印象的だった。

(3) 中日大学生交流会では中国語、日本語、英語が飛び交った。スムーズなコミュニケーションというわけにはいかなかったが、手持ちぶさたな感じの人や恥ずかしがったりしている人は一人もいなかった。英語や表情、ジェスチャーで自分の言いたいことを伝え、民族文化、国の現状、自分の夢や現在努力していることなどを話し合った。部屋中笑い声とさまざまな言語が飛び交い、めちゃくちゃのような感じもしたが、終始とても和やかな雰囲気だった。日本の大学生の親切なもてなしが心に残った。

もう12：00だ。一日が終わった。まだ興奮している。明日も楽しみだ。

日付：10月20日（火）2日目
大学名：中国石油大学
氏名：何艶娜

今日一日を一言で言うと、苦しさと楽しさが半々だった。昨晩の興奮がまだ続いている。寝不足の症状がまだ残っている。日本の何もかもが新鮮に映る。

今日のスケジュールは内容豊富で、いろいろと考えさせられた。変形した堤防、静かに語られる災害の経験……。今の神戸はすっかり落ち着きをとりもどしていた。そう、この賑やかな通りやモダンな建物の奥に歴史の重みが隠されているのだ。

先ず人と防災未来センターへ行った。優しそうな一人の老人が流暢な中国語で話をしてくれた。彼は日本生まれの日本育ちだ。一見、平凡に見えるが、彼はとても幸運な人だ。1995年の阪神淡路大震災の生存者だ。私にとって地震という言葉は遠い存在で、あまりなじみがない。そういう私も運が良いといえる。子どもの頃から今まで地震を経験したことがない。地震についてはいろいろと教わっているが、これまで全く気にかけてこなかった。地震が起こったら、急いで逃げ、安全な場所に避難すればよいと思っていた。地震シミュレーションホールに入るまではそう思っていた。地震は分単位で起こるものでも、ましてや時間単位で起こるものでもなおさらない。ほんの数秒のうちにすべてが倒壊してしまうのだ。火災、爆発、倒壊、人々はなすすべもなく立ちつくす。生存者は運が良いとも言えるが、さまざまな心理的プレッシャーに直面することになる。これらの障害をどのように克服していけばいいのか。強さ、サポート、理解……、重要なことは教訓に学ぶことだ。耐震性と減震性の高い世界で最も堅牢な建物の構造を考え出した神戸の人々は偉大だ。

午後はワコールに行った。その後、京都の大学生との交流会があった。ワコールは世界的に有名な女性下着メーカーだ。ワコールの人間科学研究所を見学した後、博物館も見学させてもらった。下着の美

しさもさることながら、デザイナーが細部まで注意を払ってデザインしている点が驚きだった。デザイン上のことだけでなく、素材の選び方や内部構造の細部にいたるまでよく考えられていた。ちょっとしたことで下着がより快適なものになる。

一番楽しかったのは日本の大学生と過ごした時間だった。楽しい踊りにふろしき。エコで可愛らしかった。その後の交流も楽しいものだった。お互いにあまり理解できない言葉を操り、唯一英語だけが頼りだった。大変だったが、楽しい交流だった。ある日本の学生が私に自分の下駄を履かせ、着物を着させてくれた。初めての着物、超うれしかった！その後、中国に留学したことのある日本の学生が通訳をかってでてくれたので、コミュニケーションの障害がなくなった。ただ彼は通訳に忙しくてあまり食事ができなかったのではないだろうか……。要するに、今日はとても楽しい一日だった。

今日はスケジュールがつまっていたせいか、もう少しで朝南京街へ行ったことを忘れるところだった。結婚紹介所の看板があった。私たちはその看板を背景に写真を何枚も撮った。良い結婚ができますようにという願いを込めて。

明日はもっとすばらしいことがあるだろう、楽しみだ。

日付：10 月 20 日（火）2 日目
大学名：首都師範大学
氏名：王邸玥

今日はとても充実した一日だった。特に人と防災未来センターが印象に残った。日本に来てまだ一日しかたっていないが、日本の若い女性はドラマやファッション雑誌で見たとおり、普通に仕事をしたりアルバイトをしたりして全く心配の無い生活を送り、ファッションやブランド品が好きという印象を受けた。日本は先進国で、収入も平均化され、グレードの高い生活を追求している。神戸の町でおしゃれをしたファッショナブルな女性を見たとき、こうした日本人女性のイメージがより確かなものとなり、神戸の女性もそういうものだと思っていた。

しかし、阪神淡路大震災のビデオを見終わった後、神戸の町を歩いていた日本人女性に対する見方が 180 度変わっていた。自分の浅薄な認識が恥ずかしくなった。日本人女性の表面的な現象しか見ていなかったのだ。彼女たちは他人には理解できない苦痛の記憶を抱えながら、力強く活きている……。夜更けや寒い日には今も消えない地震の恐ろしさに窒息しそうになりながらも……。神戸の人たちが何か悪いことをしたというのだろうか。運命とはなんと不公平なものなのか。

彼たちは普通の人よりも生命を大事にしているに違いない。なぜなら、彼らは生命のもろさを知っているからだ。人類は「自分にできないことなどない、自分こそが地球の主だ」と考えてきた。私も人類の偉大さは認めるけれど、こうした驕りによって自然に従うという永遠の原理が忘れられてしまっているようにも思う。

2 本目のビデオを見終わっとき、涙があふれてきた。小さなことで悩んでいた自分に腹が立った。もっと意味のある何かを高い志で追求していかなければと思った。

今日一番嬉しかったのは、夜の立命館の学生との交流で美里さんという女子学生と知り合ったことだ。彼女は中国語学部の一年生だ。来年、上海交通大学に 1 年留学するつもりだと聞かされた。彼女はニュージーランドにも 4 年間留学した経験がある。彼女は中国語と英語ができさえすれば、どこの国へ行っても自立して生活できると言う。

私は 1 年後彼女と上海か北京で会っている情景を想像してみた。メールアドレスを交換し合った。きっ

とまた会えるだろう。次は中国で。In my country!

日時：10 月 21 日 (水)　3 日目
大学名：北京語言大学
氏名：臧楠

今日は忙しい一日だった。

朝、バスに乗って二条城に向かい、京都の大学生と一緒に京都の文化を訪ねる旅が始まった。二条城は有名な世界文化遺産で、徳川将軍家の京都での住まいだった所だ。二条城に入ると武家の文化が感じられた。鶯ばりの廊下を歩くと本当に鶯の鳴き声がした。これで外敵の侵入を防いでいたのだが、日本人の頭のよさに感心した。二条城の中を一周してみて、日本の城と中国の宮殿にはだいぶ違いがあることに気づいた。日本の城は精緻という印象を受けた。庭園は狭いが、築山も水も木もあり、自然の中に身を置き、自然と一体になっているような気持ちになった。一方、中国の宮殿は壮大で、威圧感がある。二条城を見学した後、京都の学生たちと一緒にもう一つの世界文化遺産である清水寺に向かった。

清水寺は寺の中に湧く清水にあやかりこの名がつけられたという。清水は 3 つあった。それぞれ長寿・富・智恵の象徴で、特別な力があると信じられている。今日、私は長寿と智恵の清水を飲むことができた。最も印象深かったのは「清水の舞台」だ。これは 139 本もの柱で支えられているが、一本の釘も使われていないということだった。高い山の上に舞台があるので、日本では思い切って何かをするときに「清水の舞台」から飛び降りるというそうだ。清水寺では日本の古い文化だけでなく、規律正しく見学している小学生の姿を見て日本国民の素養の高さが見て取れた。清水寺の見学が終わると、名残惜しかったが、京都の大学生と別れた。この 2 日間で深い友情が芽生えていた。中日両国の青年はこれからも多くの交流の機会を持ち、互いに学びあい、中日友好の絆となることを信じている。

午後は待ちに待った新幹線に乗った。中国は交通分野でも世界の先進技術に追いつこうとしているが、新幹線は 1964 年に運行を開始しているので、中国よりも約 40 年早いことになる。日本の公共の場所にはよく環境保護のためのキャンペーンポスターが貼ってあることが印象的だった。ポスターで一番よく見られるのが「環境にやさしい」という言葉だ。日本国民が環境保護に真摯に取り組んでいるのが分かった。

今日は三菱電機稲沢製作所の見学もあったが、科学技術の先進性は一つの国にとって重要な意味があることを実感した。まさに鄧小平が言うように「科学技術は第一の生産力」だ。スパイラルエスカレータや高速展望用エレベータに乗ったりエレベータの製造過程を見学したりと、普段触れることのできない知識を学ぶことができた。

忙しかった一日が終わった。たくさんのことを学んでホテルに戻った。明日の箱根の温泉が楽しみだ。

日付：10 月 21 日（水）3 日目
大学名：北京語言大学
氏名：徐菲

3 日目、キーワードは時間厳守と人にやさしい設計。

今日も京都の大学生たちとの交流活動が続けられた。朝早くに京都の名所旧跡、つまり世界文化遺産である二条城と清水寺の見学に出かけた。靴下を履いたまま二条城の広々とした「鶯ばり」の廊下を歩いた。昔の腕のいい職人たちの匠の技に感嘆しながらも、寒々とした感じを受けた。こんなに広い場所

に住んでいた徳川家康はきっとひどく寂しかったにちがいないと思った。急ぎ足で主な部屋を一回りするだけで 30 分ほどかかる、注意しなければ迷子になりそうなところで生活していた昔の人はさぞかし苦労の多かったことだろう。

清水寺の名はずっと前から知っていたが、今日ついにその姿を見ることができた。大学 1 年のときに、清水の舞台から飛び降りるという典故を聞いたことがあった。先生や先輩たちから実際の清水の舞台はそれほど高くなく、飛び降りても死亡率は 10%にもならないと聞かされていたが、実際の舞台はやはり想像よりも高かった。紅葉が始まっていた。数週間後の 11 月も末になると、目の覚めるような紅色に染まるということだが、残念ながらこの目でその美しい景色を見ることはできなかった。

立命館大学の奥村さんは、清水寺から下る参道の両側に並ぶ商店でお土産を買う私にずっと付き添ってくれた。もうすぐ集合時間だと注意され、走って駐車場に向かった。日本人の時間厳守という習慣についてはここで是非触れておかなければならない。見学でも企業訪問でも、すべて一分一秒違わず時間どおりに手配されていた。正午に新幹線に乗るために駅に向かう道中や午後の三菱電機稲沢製作所の見学のときもそうだった。中でも見学の案内をしてくれる担当者が、受付にドアカードを受け取りに行くときに、よく耳にする「少々お待ち下さい」という言葉の替わりに「一分間お待ちください」と言っているのを聞いて、日本社会の時間観念の強さを実感させられた。

三菱のエレベータと聞いて中国人がまず思い浮かべるのは、おそらく上海三菱エレベータのキャッチコピー「上上下下的享受」だろうが、今回の三菱電機稲沢製作所の見学では、人にやさしい設計を非常に重視しているという点が印象に残った。宣伝パンフレットには「エレベータの運転速度は 750 m / 分、その速度で運転されるエレベータの中に立てた十円玉が倒れない」と書いてあったが、まったくすばらしいと思った。エレベータ試験塔で乗ったエレベータは 3 階から 39 階まで上がるのに 1 分もかからなかった。しかも揺れもめまいも全く感じなかった。これにも驚いた。

人にやさしい設計という点でもう一つ私の注意を引いたものがあった。この 2 日間走った高速道路も今日のお昼に乗った新幹線でもそうだったが、道路の両脇に防音板が取り付けられ、区間によっては防音板の防音効果を上げるために、内側に曲げ弧を描いたようなデザインになっていた。しかも、周辺の緑化もよくなされていた。この点は中国も日本に見習うべきだと思った。

日付：10 月 21 日（水）3 日目
大学名：中国石油大学
氏名：周鵬

来日 3 日目、時間の経つのがほんとうに速い。昨日は京都の大学生たちとの楽しい交流があったが、今日も楽しい一日になるだろうという期待が膨らんだ。京都は日本有数の古都であり、いたる所に歴史の面影が偲ばれる。二条城に着いたときには、京都の大学生たちはすでに到着していて僕たちを待ってくれていた。彼たちの案内で二条城を見学し、二条城の歴史や城主について知った。もちろん、見学の間、日本の学生たちと自分たちの夢についても語り合った。二条城の見学を終え、バスで有名な清水寺に向かった。清水寺に到着すると、まるで中国の観光地に来たような錯覚に襲われた。清水寺は大勢の人でごった返していた。その中には学生の姿が多く見られた。ウイークディだったので、なぜ日本の学生は授業のある日に旅行できるのだろうかと思ったが、後になって、日本には修学旅行というものがあることを知った。この点、日本の学生は中国の学生よりも幸せだと思った。清水寺の見学では、バスの中で知り合った京都の女子学生がずっと案内してくれた。日本の女子学生の話す声はとても素敵だった。彼女の

案内で清水寺を見学した。日本文化の真髄に触れたような気がした。その後、バスに乗って京都駅に行き本場のお寿司を食べた。それから新幹線に乗って名古屋に向かった。新幹線の乗り心地を体験することができた。名古屋に到着後、三菱電機の稲沢製作所を見学した。三菱電機の緻密な仕事とイノベーション精神が心に残った。夜、バスで浜松に向かい、忙しい一日が終わった。

日付：10 月 22 日（木）4 日目
大学名：中国石油大学
氏名：安天琳

今日は日本に来てから一番リラックスできた、忘れられない一日となった。

箱根の温泉は 3 日間の旅の疲れをすっかり吹き飛ばし、今日一日の農林業の見学でついたほこりをすべて洗い流してくれた。と同時に、箱根の温泉は私たち一行 34 人の心を一つにしてくれた。それぞれ大学が違うことであった疎外感も互いにお酒を酌み交わすうちにすっかりなくなった。先生や訪日団幹部と学生たちとの距離もだいぶ近づき、和気藹々とした時間が流れた。

34 枚の座布団が整然と並べられた宴会場の大広間に同じ浴衣に身を包んだ 34 名の姿があった。温泉に浸かって全身の疲れと汗を洗い流したばかりで、みんな頬を紅潮させていた。9 名の男子学生はあたかも希少動物でもあるかのように、先生の命令で強制的に 19 名の女子学生の間に座らせられたので、もともとお風呂で赤くなっていた頬がいっそう赤くなった。まるで 32 個の熟した真っ赤な富士リンゴのように……。王団長から原理原則にのっとった政治意識の高い、多少長めだったが、生き生きとした挨拶があり、渡辺先生からは心のこもった祝福があった。本格的な日本式宴会が温かい雰囲気の中で始まった。それからすぐに、宴会を盛り上げるのが上手なガイドの呂さんが全ての学生を次から次へと舞台に上げた。彼に「促され」、ある者は下手ながらも日本の歌を唄い、ある者は子供のころに流行ったがとっくの昔に時代遅れになっているダンスを披露した。僕たち石油大学の男子学生も「この難から逃れる」ことができず、男子学生 4 人で舞台に上がり「吠えた」が、まったく音程がはずれ、間抜けさを露呈してしまった。班長の周さんは「One Night in Beijing」の歌詞を完璧に忘れ，温浩の「愛の初体験」も暴走して失敗。張振欣君の誕生日の告白と完全に予想を裏切る「祖国に石油を捧げる」のすばらしい歌声によって、ついに石油大学の男子学生のメンツを 3 点挽回することができた（笑）。宴会もここまで来ると、メンツだとか、イメージだとか役職がどうのこうのはまったくどうでもよくなり、ただ騒いで痛快だった。酌をしたりされたり、宴もたけなわ。真剣なまなざしと会心の笑い声、高揚した気分、紅く染まった頬、みんな縁あって箱根の山中で酒を飲みながら歌い人生を語り合う……。わさびの辛さも爽快で、清酒の喉ごしも良かった。誰もが小声で歌を口ずさみ、ダンスに合わせてリズムをとった。訪日団全員が今夜一つの家族になった。

PS：王磊先生の「殺人」（今中国で流行っている殺人ゲーム）は本当に超強かった……。

日付：10 月 22 日（木）4 日目
大学名：中国石油大学
氏名：温浩

10 月 22 日、バスに乗って磐田市に行き静岡県農林技術研究所を見学した。企画経営部の柴田茂樹さんから概要説明を受け、研究所の展示ホールやハウス栽培を見学した。

柴田さんの説明でいろいろなことを学んだ。研究所で行われている植物の新品種は主に遺伝子組換え、倍数性育種、F1 育種、突然変異育種、種族間交雑育種などの方法がとられているという。また、ハウス

栽培のメロンや他の植物の栽培過程やハウスを見学した。農林学校の学生や先生とも交流の機会を持つことができた。

昼食は磐田市の和食レストランで食べたが、とても美味しかった。午後は JA 遠州の中央園芸流通センターを見学するためにバスで 40 分ほどの距離を移動した。

園芸流通センターでは、農作物の流通方法やここで研究している独特の植物に関する説明があった。例えば海老イモは高級食材で、500g 数千円の高値がつくそうである。また、LED 培養箱やこの培養箱を使ってどのように植物の葉と花を同時に育てるかについても説明を受けた。こうして開発されて付加価値のついた花が市場で売られていた。非常に値段が高い。

2 時 30 分頃、バスで箱根の温泉旅館に向かった。2 時間ほどの道のりだったが、山道を走り、ついに箱根に到着した。

少し休憩をとった後、私たちは待ちに待った温泉に入った。初めての日本の温泉ということで気持ちが高ぶっていた。その後、懇親会が開かれ、訪日団の先生や学生が一緒になって料理を食べ、お酒を飲み、歌を唄った。そして、黄征君と張振欣君の二人が異国で迎えた誕生日をみんなで祝った。懇親会はとても楽しい雰囲気のなかで終わった。

誰もが愉快な時を過ごした後、僕たちはもう一度温泉に入った。温泉に入りながらみんな言いたいことを言いあった。そして、部屋に戻ると、王先生と学生 4 人で約 2 時間、「殺人」ゲームを楽しんだ。今日の日程はこうして終了した。みんなすぐに深い眠りについた。みんないい夢を見ているだろうか。明日もまた新しい一日が始まる。

日付：10 月 22 日（木）4 日目
大学名：首都師範大学
氏名：郭潔威

早朝、バスで磐田市に向かい静岡県農林技術研究所を見学した。ここでは主に農作物の栽培技術に関する研究が行われていた。この研究所の売りは「施設園芸」で、研究所内には大小各種のハウス温室があった。データの採集や生産への応用といった栽培に関する研究が行われているという。さまざまな新品種の研究開発によって、作物の生産量や品質が大幅に向上し、多くのハイテク農作物が生産されていた。また、新技術の研究開発を重点的に行うと同時に、特に環境保護にも力を入れ、環境や生態系を破壊しないように注意している。ここ数日、日本の大型工場を見学したが、全体としてとても印象的だったのは、日本が産業効率と同時に環境保護にも十分配慮しているという点だった。すべての研究開発は環境を破壊しないという前提で、環境と自然との持続可能な歩調のとれた発展を目指して進められていた。この点は目下経済の高度成長期にある中国社会も学ぶべきだと思った。

研究所の展示ホールには最先端の研究成果が展示され、新技術の原理についても理解を深めることができた。その後、外に出て温室栽培されているメロンや野菜など、一連の農作物のハウスを見学した。どの苗も研究者によって丁寧に世話されていた。温度湿度はもとより、光線についても入念にコントロールされ、厳密にチェックされていた。このように厳しく管理しているからこそ、多くの作物の開発と普及ができるのだ。その後、地元の農林学校の学生が農場で授業を行っている様子を見学し、彼たちが作ったみかんをご馳走になった。

午後は JA 園芸流通センターを見学した。ここは日本でも唯一の大型園芸流通センターである。また、日本でも唯一というハイテク機械が何台も導入されている大規模な流通センターだった。ここでは農家と連携しながら農作物を集荷し、日本全国に出荷するだけでなく、農業技術に関する研究も一部行われ

ていた。関係者の丁寧な説明により、私たちは物流の状況や日本農業の現状について理解することができた。

夜、箱根に到着し、初めて温泉に入った。とても気持ちがよかった。特に露天風呂に入っていると、自然と一体になったような感じがした。露天風呂は山の冷たい外気に包まれていたが、浴槽のお湯はあつあつで、湯気が立ち上っていた。温泉から出た後は身体の芯から温まり、とても気持ちがよかった。夜は浴衣を着ての宴会で、会席料理を食べた。訪日団にとって初めてのとてもリラックスした宴会となった。学生の多くが歌を唄い、さまざまな芸を披露した。多芸多才の人が多く、大いに盛り上がった。梅酒や清酒を飲み、日本を存分に体験することができた。今日はきっと思い出に残る一日になることだろう。

日付：10 月 23 日（金）5 日目
大学名：中国石油大学
氏名：張振欣

訪日 5 日目。ついに東京にやってきた。

今日一日は主に三菱グループの見学だ。まずはじめは三菱化学である。日本の老舗的化学メーカーである三菱化学は、日本の化学応用分野の成長と発展を見守ってきた証人だ。また、三菱化学は世界でも数少ない白色 LED 技術を擁するハイテク企業であり、さまざまな分野で重要な地位を占めている。三菱化学が生産するピッチ系炭素繊維は幅広い分野で応用されているが、それはピッチ系炭素繊維が同じ重量という条件でより大きな強度があること、据付に便利なこととその信頼性によるところが大きい。三菱化学の表面活性剤も日用品や化粧品などに使われ、日本中にその名を知られている。また、白色 LED は十分な光度があり、経済的かつ省エネである。三菱化学はさまざまな分野の製品を網羅し、強大な研究開発能力を持ち、製品の実用的価値や社会的価値も高く、応用性にも優れ、大きな市場と将来性が期待される。

三菱化学の後は東京海上日動保険を見学した。東京海上日動火災は歴史が最も古く、さまざまな顧客層を持った保険会社である。東京海上日動は「すべては顧客のために」という原則に基づき多方面にわたる保険業務を行っている。業務の拡大とともに東京海上日動は国際的大手保険会社として発展していった。世界の大手保険会社の中でも東京海上日動は、かなり早い時期から中国に進出している会社の一つであり、中国の外国保険会社の中でも保険料収入で長い間第一位を占めている。改革開放が進むにつれて、中国ではますます多くの大型プロジェクトが保険に入るものと思われるが、東京海上日動の対中事業にとってそれはまたとない機会となるだろう。

次の訪問先は三菱商事だった。「商事」とは一体何を意味するのか、説明を聞くまではよく分からなかったが、説明を聞いて、「商事」の機能についてよく理解することができた。三菱商事の創設から現在まですでに約 100 年が経過している。三菱商事の歴史は、ある財閥が「小」から「大」へと規模を拡大し、単一的なものから複雑なものへと進化を遂げた歴史でもある。現在の三菱商事は単なる商品取引を行うだけでなく、商品流通に関する研究開発や生産分野にまで参入し、独自の産業チェーンを形成している。あくまで貿易を中核とするという前提条件で、自社の産業チェーンを形成し、システム的供給を図っている。また、コスト削減をしながら会社の抵抗力と競争力を強化し、それらを今後の発展に必要な原動力と資源的保障としている。

日付：10 月 23 日（金）5 日目
大学名：北京語言大学
氏名：張偉鑫

朝 8 時半ごろ箱根を出発し、新幹線「こだま号」に乗って東京の品川駅に到着した。その後、バスで三菱化学に向かった。今日の主な見学先は三菱化学、東京海上日動火災と三菱商事である。今日は東京の第 1 日目だったが、三菱の力に圧倒された 1 日でもあった。

まず、三菱化学は 1934 年に設立され、石炭をベースに発展してきた会社であるが、創業以来 70 年近くを経た今、三菱化学は総合化学原料メーカーへと発展し、太陽電池、ポリ袋、メガネレンズなど、およそ化学技術に関わるすべての産業に貢献している。そしてその技術レベルは国内ナンバーワンである。

東京海上日動火災は保険会社で、創業者は渋沢栄一氏である。今は三菱と合併し、三菱グループの一員となっている。会社の概要説明の中で最も興味を惹かれたのは CSR プロジェクトである。CSR は一般に「企業の社会的責任」と訳されるが、中国ではまだ余り知られていない。東京海上日動は CSR として希望小学校の建設、大学奨学金、植樹等のすばらしい活動を展開している。この点は中国の企業も参考にすべきだと思った。

三菱商事の第一印象は高級感と巨大さだった。三菱商事は日本最大の総合商社であり、日本独特の企業形態によって国内と海外約 80 カ国に 200 余の支店を持つ。事業は貿易や投資など多方面にわたり、その業務は全面的かつ多元的だ。三菱商事の扱う製品はラーメンからミサイルまでと言われるようにすべてを網羅し、営業額は日本の財政予算の 4 分の 1 に相当するという。その金額と業務範囲の広さ、潤沢な資金に驚いた。

今日は午前中からずっと「三菱はなぜこんなに発展したのか」ということを考え続けていたが、これは三菱商事 3 綱領と関係があるように思う。3 綱領とは即ち「所期奉公」、「処事光明」、「立業貿易」である。それぞれの具体的な意味は次のとおりである。所期奉公：事業を通じ、物心共に豊かな社会の実現に努力すると同時に、かけがえのない地球環境の維持にも貢献する。処事光明：公明正大で品格ある行動を旨とし、活動の公開性、透明性を堅持する。立業貿易：全世界的、宇宙的視野に立脚した事業展開を図る。

「3 綱領」は三菱 4 代目当主岩崎小彌太の訓諭をベースに、1934 年に制定された旧三菱財閥の行動指針だったが、三菱財閥解体後は三菱商事の企業理念を表す 3 綱領として、その精神は経営陣や社員の一人ひとりの心の中に息づいている。

日付：10 月 23 日（金）5 日目
大学名：首都師範大学
氏名：趙雲

今日は箱根から新幹線で東京に来た。訪日 5 日目が東京でスタートした。東京に着いてすぐに生活のテンポが速くなったように感じた。新幹線の駅構内では忙しそうに歩くサラリーマンを多く見かけた。数日前に行った京都や神戸と比べ、東京の人口密度は明らかに高いようだ。しかも、数日前と違うのは、東京は高層ビルが林立し、京都のような静けさ穏やかさはないが、生命力と活力に溢れる街だという点だ。

午前中は三菱化学の本社を見学し、昼食も三菱化学で食べた。文化系専攻の私にとっては、今日の見学内容はなじみの薄いことばかりだったが、それが却って新鮮に感じられ、知識も増えた。三菱化学の製品は多岐にわたり、生活の中でよく見かける品物のすべてが生産されていた。中でも現在開発中のコンセプトカーの技術はかなりレベルの高いものだった。三菱化学の関係者と中国人社員と一緒に昼食を

とった。私の隣に座ったのは明日のホームステイでお世話になる戸川さんだった。60 歳を超えた戸川さんは想像していたよりも溌剌としていて、明日の予定を詳しく教えてくれた。

三菱化学を後にして、午後は東京海上日動火災と三菱商事本社を訪問した。そして、夜は会社の関係者や中国人社員と一緒に会食した。中国人社員との交流の中で留学や日本企業への就職に関する情報をいろいろと得ることができた。これは就職活動をすでに始めている大学 4 年生の私にとってずいぶん助かった。

夜の東京もとてもきれいだった。ホテルの部屋に入ってまずしたことは、窓際に立って東京の夜景を眺めることだった。東京タワーが遠くにくっきり見えた。東京は日本の首都としてその名に恥じない美しい都市だと思った。

明日から 2 日間のホームステイだ。すでに戸川さんに会っているが、やはり緊張する。日本語はできるが、今回のように日本の家庭にお邪魔するような機会はこれまでほとんどなかった。明日はきっととても充実した一日になるだろう。日本の文化を理解するだけでなく、日本人にも是非中国文化や中国の大学生と青少年の中日友好に対する決意や思いを理解してもらいたいと思う。

日付：10 月 24 日（土）6 日目
大学名：北京化工大学
氏名：高遠

ホームステイ？　ホームステイ！

日本に来る前、日本に行ったら是非日本人と寝起きを共にして、本当の日本文化を体験したいと思っていたが、時間が経つにつれ、他の団員と同じように、この気持ちに少しずつ変化が現れた。期待がすっかり緊張に変わってしまったのだ。ホームステイの 2 日間、日本人のことがうまく理解できないのではないか、失礼なことをしてしまうのではないか、日本人と何も話せないのではないかと、心配はつのるばかりだった。

その日がついにやってきた。呂さんの案内で日中経済協会に行った。決められた席で待っていると、どんどん緊張してきた。ホストファミリーが到着し、団員の学生を次々と連れて帰るのを見て、今度は焦りの気持が出てきた。早く迎えに来てほしいという焦りの気持ちだ。今日と明日の 2 日間の楽しい生活に早く入りたいと思った。渡辺さんに「高遠」と呼ばれたときは、嬉しくて飛び上がりたい気持ちだった。何がなんだか分からないままに、気付いたときにはホストファミリーの家に向かう途中だった。私を迎えに来てくれたのは三井物産の石井頼尚さんだった。「そう呼ばれるとなんだか他人行儀だね」と、彼は流暢な中国語で言った。そして奥さんの中国語は自分よりうまいと言った。急にあれこれ心配していた自分が可笑しく思えてきた。石井さんは今年 28 歳で、いわゆる「80 後」世代だ。歩きながら話していると、しょっちゅう中国と日本の間を行ったり来たりしている間に奥さんの夏子さんと中国で知り合い、結婚することになったそうだ。夏子さんは天津で 8 年間暮らしていた。石井家ではまるで自分の家にいるようにのびのびできた。

石井さん夫婦がとても親切だったことは言うまでもないが、二人は中国に対し深い思いを抱いていた。夫妻が中国で知り合い結婚をしたということ以外にも、中国文化がとても好きで、家にはたくさんの中国の工芸品が飾ってあった。石井さんは中国で 3 つの省以外は全部行ったことがあると言っていたが、これも石井さんの中国への思い入れが強い理由になっている。

夏子さんは今年の 5 月 16 日に「沙月」ちゃんを出産した。産まれて 5 ヶ月になる可愛い沙月ちゃん

も私にまる一日付き合ってくれた。本来はたっぷり食べてぐっすり眠らなければいけない BABY なのに、今日はまるまる一日、一緒に「東京」見物をしてくれた。石井さん一家が本当に親切に温かく接してくれたので、少しも堅苦しい感じがなかった。

今日は天が味方してくれなかった。午後から小雨が降り始めた。私たちは大観覧車に乗った後に帰宅し、一緒に晩ご飯の準備をした。鶏肉ダシの「鍋」だった。今日一日とても ENJOY した。明日への期待が広がる。明日のスケジュールも実は午前中に石井さんと一緒に決めたのだが……。それにしても今日は楽しかった。

日時：10 月 24 日（土） 6 日目
大学名：北京化工大学
氏名：羅龍哲

今日はホームステイの 1 日目。朝 9 時半に日中経済協会に到着し、ホストファミリーの迎えを待った。10 分後、私のホストファミリーである塚越さん一家が 4 人全員でやって来た。家族総出で迎えに来てくれるとは思ってもみなかった。

午前中は塚越さんの母校である東京大学を見学した後、学食で昼飯を食べた。午後は私の行きたいところへ案内してくれるということで、原宿に行った。そして家へ帰り、プレゼントを交換し合った。塚越さん一家はとても興味深いプレゼントをいろいろと用意してくれていた。私が持ってきた中国のジャスミン茶、ビスケット、お菓子もとても喜んでくれた。

夕食は日本式のお鍋だった。夕食後はみんなでトランプをした。新しい遊び方を覚えた。

塚越さん一家はこのホームステイのために、僕の故郷の長春のことをインターネットでわざわざ調べてくれていた。また、僕が日本語を勉強している学生であることも知っていた。僕が中国で書いた「私の日本の印象」という作文も読んでいて、日本語の『敬語指南』という本を買っておいてくれていた。この作文に日本語の敬語はとても難しいと書いていたからだ。

塚越さん一家は本当に細かい気配りをしてくれた。僕だったらとてもここまではできないだろう。

日時：10 月 24 日（土） 訪日 6 日目
大学名：北京語言大学
氏名：蔡瑋

今日の日記のテーマは「ホームステイ」。

朝、日中経済協会へ向う途中、他の団員たちと冗談で、誰が最後まで残るか賭けようと言っていたが、結局、私がすべての団員がホストファミリーに迎えに来てもらったのを見届けるという、なんとも光栄な瞬間に立ち会うことになった。

でも、ホストファミリーの迎えが最後だったために、郭沫若先生の直筆を目にすることができた。

10 時ごろ、待ちに待った松木さんがようやく迎えに来てくれた。思いがけず、可愛い 2 人の子ども、のりちゃん（3 歳）とさとちゃん（4 歳）を連れていた。この 2 人は本当に可愛らしかった。誰もがその小さな手をとり、まんまるとしたほっぺを触ってみたくなるような子どもたちだった。こんなに可愛い子ども、しかも 2 人と一緒に 2 日間を過ごすことを考えたらうれしくなって、緊張もあっという間に解けた。

子どもたちは最初、少し恥ずかしがっていて、話しかけてもうなずくだけで口を開こうとしなかったが、

3 分も経つと、いつもの調子に戻り、車に乗るとすぐに大人にはわからない言葉でにぎやかにしゃべり始めた。そして今日の第一目的地である横浜の中華街に着くころにはすっかり私に懐き、「お姉ちゃん」「お姉ちゃん」とひっきりなしに呼びかけられた。「この 2 日間はきっと幸せな 2 日間になるだろう」と、なんとも素晴らしい予感がした。

中華街は道の両側に中国らしい店舗がたくさん建ち並び、人通りも多く、とてもにぎやかだった。でも松木さんによると、今日は人が少ないほうだという。日本人は中国にとても興味があることが分かった。少なくとも食の面では。

中華街の揚州飯店で日本の中華料理を味わった。なかなか美味しかった。確かに中国本土の中華料理の味とは違うが、日本特有の風味が加わって、なかなかいい味を出していた。やさしい性格の松木さんはまずリュックサックの中から子どもの食事用エプロンを取り出し、2 人の子どもの好みに合わせて食事を取り分け、餃子を小さく分けて冷ましてから、ようやく自分の食事に取り掛かった。

松木さんは子どもたちの世話を焼きながら、私にこの子は熱いものが食べられないだとか、この子は辛いものが食べられないだとか説明してくれた。その几帳面さには頭が下がった。リュックの中には子どもたちの上着や長ズボン、ハンカチ、ナフキンが入っていて、必要なときにすぐに取り出して使えるようになっていた。専業主婦の妻を持ち、仕事が忙しくても、日本のお父さんはこんなにも丁寧に子どもの世話をするものなのか……。日本の子どもたちがこうした両親の細やかな心配りのもとで大きくなっていくことを知った。

昼食の後、港へ行って観光船に乗り、美しい港の景色を楽しんだ。3 時には子どもたちのおやつの時間ということで、私も一緒に美味しいケーキをいただいた。

日本に着いてから毎日緊張の連続で疲れているだろうと、松木さんは私にゆったりとリラックスできるスケジュールを立ててくれていた。3 時のお茶を終え、4 時ぐらいに松木さんの家へ向った。途中スーパーに立ち寄ったので日本のスーパーを体験することができた。

松木さんの家に着くと、簡単な化粧でも十分に美しい奥さんが門の前で出迎えてくれた。奥さんは松木さんと同じように気さくで、その誠実さが人に安心感を与えていた。いっしょにいてほとんど緊張感を覚えることがなかった。

松木さんの家は典型的な日本家屋で、二階建ての一軒家だった。そんなに大きくはなかったが、合理的な造りで、装飾もシンプルでさっぱりとしていた。客間には子どもたち専用のスペースがあった。家に着くと、2 人の子どもたちはすぐにテレビの子ども番組に飛びつき、松木さんはその傍らで新聞を読み、奥さんはキッチンで食事の支度を始めた。私が来たことで何かが妨げられるというようなことは一切ないようで、これが彼らの普段の生活なのだ。中国に行ったことのある松木さんが、日本人の普段の生活を知りたいと思っている私のために、あえて特別なことをしなかったのか、あるいは、もしかすると、これが彼らの性格なのか。どうであれ、私はとてもリラックスすることができたし、日本人の本当の普段の生活を目にすることができた。

夕食はハンバーグだった。奥さんによると、日本の子どもが一番好きなメニューだという。確かにとても美味しかった。ハンバーグには松木家オリジナルの食べ方や「家庭」の味がつまっていた。

日時：10 月 24 日（土） 6 日目
大学名：中国石油大学
氏名：張振欣

今日は少し曇っていたが、とても早く目が覚めた。ホームステイの日だったからだ。

朝食をすませると、あわただしくホテルを出発し、ホストファミリーと対面する場所に向った。あま

り大きくない部屋でドキドキしながらホストファミリーの到着を待った。10 分後、中肉中背の溌溂とした表情の中年男性が部屋に入ってきた。僕のホストファザーの世古口修さんだった。

簡単に挨拶を済ませ、僕と世古口さんは部屋を後にした。世古口さんの家へ向う途中、いろいろな話をした。世古口さんは日立マクセルに勤めており、今年 1 月にアメリカから帰国したばかりだという。駐車場でホストマザーのマリアさんと対面した。マリアさんは明るく活発なお母さんだった。僕を見ると、とても喜んでくれた。

駐車場を出ると、まず住宅街の中にあるお茶屋に連れて行ってくれた。マリアさんによると、このお茶屋は 5 年前にできたものだが、内装が非常に凝っていて昔風の造りになっているという。ここで新鮮な緑茶を味わいながら、午後の予定について話し合った。ときどきコミュニケーションに支障をきたしたが、彼らが僕をとても歓迎してくれていて、僕にいろんなものを見せたいと思っていることはよく伝わってきた。

世古口さん一家はサッカー一家として知られていたが、これは浦和のサッカー熱の高さと大いに関係がある。世古口さんと 2 人の息子にとっては「サッカーこそ命！」というふうだった。家族でテレビを囲んで好きなチームを応援している様子が想像できるが、それはなんとも温かく、楽しい時間に違いない。

13 歳と 9 歳の 2 人の息子はサッカーを観戦するだけでなく、自分でもプレイをする。世古口さんが息子たちがサッカーの練習をしている場所に連れて行ってくれた。そこは中国の学校と同じような感じで、子どもたちがサッカーの練習をするのを保護者が見守っていた。子どもたちがまだ小さいからというよりも、子どものそばに寄り添い、子どもたちの成長を見守りたいという親の気持ちが伝わってきた。世古口さんはきっぱりと、子どもと家族が人生の中心だと言っていた。

この日の夕食は寿司だった。この前ホテルで食べた寿司とは違って、今回は手作りだった。日本の家庭ではどんなふうに食事をするのか、とても興味があったが、実際は中国とあまり変わらなかった。伝統的で、種類が多かった。手巻き寿司は簡単に作ることができた。でも、そのなんの変哲もない中に、一つの家庭の歴史がつまっている。中国の家庭も同じだ。

あっという間の一日で、少し疲れた。心が温かい気持ちで満たされていくのを感じながら眠りについた。

日時：10 月 25 日（日） 7 日目
大学名：北京語言大学
氏名：崔上智

今日はホストファミリー一家と一緒に幼稚園のお祭りに参加した。私はそこでお母さんたちの手作りのおもちゃを買った。ここでの売り上げはすべて次の活動の経費になるという。また、盲導犬訓練のデモストレーションも見た。募金箱に少しお金を入れると、うれしい気持ちになった。たくさんの人のおかげで日本を訪問することができ、こんなにも多くのことを体験し、多くのことを学ぶことができたので、社会に恩返ししたいと思っていたからだ。

朝食はホストマザーと一緒にサンドイッチを作った。お母さんは丁寧にサンドイッチの作り方を教えてくれた。お昼はみんなでお好み焼き屋へ行って、自分たちでお好み焼きを焼いて食べた。ホストファミリーの人たちは私にいろいろなことを経験させ、私のために食事を作り、私が自然に日本人家庭の中に溶け込めるようにしてくれた。本当にありがたいと思った。これらの経験から得たものは大きい。

午後 4 時、ホテルに着いた。一家全員で送ってくれたが、坊やは別れのときが近づいているのを知ってかとても寂しそうだった。そしてずいぶん長い間私と歩き、最後に一緒に写真を撮った。彼らと一緒

に過ごした素晴らしい時間は一生忘れないだろう。皆さん、本当にありがとうございました。

夜はお台場へ行き、トヨタのショールームを見学した。車のショールームを見たのは始めてだったが、ショールームは 1 階と 2 階に分かれ、とても豪華だった。

日時：10 月 25 日（日） 7 日目
大学名：首都師範大学
氏名：劉吉

今日はホームステイの 2 日目。午前 8 時過ぎに起床すると、中沢さん夫妻はすでに部屋を片付けていた。10 月末の長野はちょうど紅葉が真っ盛りで、窓の外の景色は美しく、一面黄金色に輝いていた。朝、ベランダで伸びをして遠くを眺めると、生きて生活していることのすばらしさを実感した。9 時、朝食が始まった。朝食は一家全員が集まる時間であり、窓を背にして、片手にコーヒー、片手にサンドイッチを持ち、中沢さんとは現在の経済情勢を、中沢さんの奥さんとは娘さんの生活について話をしていると、まるで家族の一員になったような気がした。

朝食の後は中沢さん夫妻を手伝って別荘の掃除をした。週末しか別荘に来ないため、別荘を離れるときにはいつもしっかりと掃除をする必要があるのだという。まずは自分が使った部屋から始めた。ベッドを整え、床を掃き、雑巾をかけた。それから他の寝室、最後に 1 階の掃除をした。白髪が目立つ中沢さんだが、元気に別荘の掃除をしていた。なるほど日本人は平均寿命が世界で最も長く、60 歳を過ぎてもこんなに元気なのだと感心した。

1 時間余り掃除した後、食べるものと荷物を持って東京に戻る支度をした。車に乗る前に中沢さんの奥さんと一緒に別荘の周辺を散歩し、日本の秋の朝を満喫した。周りはすべてヨーロッパ式の建物で、草も木も豊かに茂り、たまに近所の人と出会うと、親しげに挨拶を交わしたり、立ち止まって二言三言会話をしたり、とてもよい雰囲気だった。

東京に戻る途中、ちょうどバザーをやっていた。中沢さんが教えてくれたところによると、収穫した農作物を展示し、ハロウィーンを祝うために年に一度開かれるバザーだという。

バザーの会場はとてもにぎやかだった。地元農家による農作物の販売があったり、誰の野菜が一番大きいかを競い合うコンテストや農業大学の学生による農業に関する知識の紹介、ゲームなどが行われていた。その中でもあるゲームがとても面白かった。農業大学の学生たちが大小さまざまなカボチャを並べ、その重さをお客さんに当てさせて、正解したら景品がもらえるというものだった。カボチャはどれも学生たちが自ら研究・栽培した品種であった。一番小さなカボチャを抱えて、スイカを買うときの要領で「5 キロ！」と言うと、学生がびっくりしていた。正解は 6 キロだったが、正解に近かったので景品をもらった。小さなカボチャ 1 個だった。バザーには子どもたちが参加できる出店もあって、カボチャの彫刻や木工工作など、いろいろと興味深かった。

また、山の上の別荘のオーナーたちの出店もあり、世界各地で買った土産物を売っていた。国連の仕事でアフリカに滞在していたことのある女性はそのとき集めた小物を売っていた。彼女は売り上げをすべてインドネシアの震災地に寄付するつもりで、傍らには募金箱も用意されていた。また、特色のある軽食も売られており、中沢さんがいくつか買ってくれた。人々がおしゃべりをしたり笑ったりしているのを見ながらそれを食べていると、自分も中沢家の一員で、家族と一緒にバザーに来て屋台の料理を味わっているような気持ちになった。

午後 2 時過ぎ、東京に戻って中沢さん夫妻と一緒に中華料理を食べ、楽しい 1 日が終わった。別れる時、

中沢さんの奥さんは「別れの言葉は言いませんよ。私たちの友情は始まったばかりだから。これからも連絡を取り合いましょう」と言った。

日時：10 月 25 日（日） 7 日目
大学名：首都師範大学
氏名：趙雲

ホームステイの 2 日目。昨日の疲れもすっかりとれ、新たな 1 日への期待が高まる。朝食を終え、戸川さんと奥さんと一緒に戸川さんの家からそう離れていない蘆花恒春公園へ行った。そこには明治時代の建物がいまなお当時の姿のまま残されていた。日本の庭園は至るところに緑の美しい木々や澄んだ水がある。建物の中は自由に入って見学できるようになっていた。続いて、次大夫堀公園民家園へ向かった。昨晩は、東京は一晩中雨が降っていたため、朝の公園は少し肌寒かった。公園内の建物は昔のままの状態をとどめているということだった。園内では最も伝統的な方法で鉄器が作られていた。機械を使って作ったものに比べればいろいろと規格に合わないところもあるが、素人が作ったものとしては十分であった。

昼食後は原宿を見学した。原宿は若者が集まる場所であり、奇抜な格好をした若者がたくさんいた。しかもちょうどハロウィーンのシーズンであったため、仮装した子どもたちもいて、とても可愛らしかった。週末の原宿は普段に増してにぎやかで、たくさんの若者が集まっていた。表参道にも足を伸ばした。表参道は原宿とは異なり、高級感漂う商業街である。ここの建物の多くは有名な建築家が設計したものだ。戸川さんの奥さんが表参道について熱心に説明してくれた。

時間が迫り、急いでホテルに戻らなくてはならなくなった。手続きを終えた後、戸川さん一家に別れを告げた。2 日間という短い時間ではあったが、別れるのが辛かった。戸川さんが「自分たちは日本のお父さんとお母さんだ」と言ってくれた。このとき戸川さん夫妻に向って初めて「お父さん」「お母さん」と呼びかけた。そのときの気持ちは言葉では言い表せないものだった。私は二人に北京にぜひ来てくださいと言った。そのときは私がホストになって中国や北京のことを紹介したいと思う。

夜、お台場からホテルに戻った。少々疲れてはいたが、いまだ興奮冷めやらずという状態だった。ホームステイは終わってしまったが、私と戸川さん一家との縁は終わることはないと信じている。頑張らなくては！将来のために、今回の訪日が順調に進むように、そして未来の中日友好のために、頑張らなくては！

日時：10 月 25 日（日） 訪日 7 日目
大学名：首都師範大学
氏名：郭潔威

今日はホームステイの最終日。朝、目覚めた私を最初に迎えてくれたのは可愛いチャチャだった。ベッドのそばに寄ってきて、私の手を舐めた。昨日の夜はぐっすり眠れた。きっとこのところの疲れがたまっていたのだろう。昨晩はまるで自分の家のベッドのように、安心してぐっすりと眠ることができた。

1 階に降りてお父さんとお母さんに「おはようございます」と挨拶し、私の新しい 1 日が始まった。お父さんがチャチャの散歩に行こうと誘ってくれた。外は小雨が降っていた。日本に来てから初めての雨だった。空気が湿っていて、体を思いっきり伸ばして深呼吸したい気分になった。住宅街はひっそりとしていて、しとしと降る雨の音が聞こえるだけだった。たぶん日曜日だからだろう。人影はほとんど

なかった。私とお父さんはチャチャに雨具を着せて散歩をした。日本人の環境意識はやはり高い。それは一般市民の一人ひとりにまで浸透しているようだった。お父さんがチャチャを連れて散歩に出るときは必ず小さな袋を持ち歩く。中には古紙と水が入っている。古紙はチャチャの糞を包むため、水はおしっこを洗い流すために使うという。ペットを飼うことで環境を破壊する人は一人もいないのだ。

散歩の途中、日本の住宅事情についてお父さんに質問した。東京の地価はとても高いことが分かった。これまで北京の地価ほど高いものはないと思っていたが、やはりまだまだ知らないことが多い。

朝食は盛りだくさんな日本式の食事だった。味噌汁に焼き鮭、ご飯、それにちょっとしたおかず、すべてお母さんの手作りだった。朝食の後、みんなで原宿に出かけた。原宿は流行の中心地であり、日本の流行はすべてここから生まれるという。右も左もおしゃれなファッションに身を包んだ若者ばかりで、ありとあらゆる色彩にあふれ、にぎやかだったが、やはり自分と原宿の間には少し距離があるように思えた。派手なものは人の目をくらませるが、やっぱり本来の姿を失ってはいけないと思った。

午後３時 40 分、里佳さんが早めに代表団の集合場所に送ってくれた。私はまだ十分時間に余裕があると思っていたが、里佳さんは遅刻しないようにと早め早めの行動だった。日本人は本当に時間をよく守る。これは素晴らしい美徳だと思う。一切の行動は規律があってこそ保障されるのだから。日本に来てからは毎日、こうした小さな感動の連続だった。

２日間のホームステイはあっという間だった。これは私にとってまったく初めての体験だった。知らない人の家に泊まり、普通の日本人と楽しい一日を過ごし、日本人の親切さと行き届いた心配りを感じたことで、日本をより身近に感じ、より深く理解できたように思う。日本滞在の日々もいよいよ終わりに近づき、去りがたい思いがつのるが、今回の貴重な経験はきっと素晴らしい思い出になることだろう。残りの数日を大切に過ごし、しっかりと学んで帰りたいと思う。そして、日本を去るときには、心残りなく、素晴らしい思い出をたくさん携えて、この旅を終わらせたいと思う。

日時：10 月 26 日（月） ８日目
大学名：北京化工大学
氏名：鄧玲玲

午前中、秋葉原へ買い物に行き、免税店で友人たちへのお土産にストラップを買った。SO EXPENSIVE! 父と祖父のために髭剃りも買った。本当は叔父にも買おうと思っていたのだが、叔父はたくさん持っているので必要ないと思ってやめた。自分用にはじゃがいもの皮むき器とカットナイフを買った。私は包丁を使うのが苦手なので、休みのときに家で料理をするときに便利だろうと思ったのだ。

その後、中国駐日大使館へ行った。崔大使が親切に迎えてくれた。崔大使を囲んで中日関係をどのように改善するかについてディスカッションをした。団員たちは次々と自分の意見を述べたが、私は発言できなかったので、ここで自分の考えを述べたいと思う。

双方の国民に見られる敵対心は、双方がお互いにお互いのことを理解していないことと大いに関係があるように思われる。どちらも自分は相手のことを十分に理解していると思っているかもしれないが、その理解はメディアや書籍の評論などを通したものに過ぎないのではないだろうか。メディアや本の評論はその発言者の視点や立場によって異なり、相手に対する認識も一方的であったり、あるいはねじ曲げられていたりすることがある。そのために双方とも正しく相手のことを理解することができなくなり、相手に対する不快感が生まれ、それが激しい対立にまで発展してしまうことになる。しかし、相手に近づき、相手の生活にまで入ってみると、自分の考えが偏っていたことに気がつく。この「走近日企・感

受日本」プロジェクトは中国日本商会の支援によるものだが、中国国内でも同じような活動を行い、日本の若者たちに「中国に触れ、中国を感じて」ほしいと思う。私たちの世代でも政治の世界に入ろうとしている人たちは大勢いるし、その人たちがこれから高い地位に上がっていく可能性もあるわけだから、双方の政治に携わる人たちが相手をよく理解し、厚い友情があれば、私たちの未来は明るいものとなるだろう。

ただ、このような「走近日企」だけではまだまだ不十分だと思う。一橋大学の学生が言っていたように、日本を全面的に理解することが必要だ。日本の大手企業や中上流階層の理解だけにとどまっていてはならない。今後はこうした活動をさらに充実させ、日本の底辺にある人々の生活についても知り、彼らの暮らしに対する考えや姿勢を理解する機会が持てるようになればと思う。

日時：10 月 26 日（月） 8 日目
大学名：北京語言大学
氏名：成鵬

今日の東京は一日中雨だった。でも僕たちのスケジュールには全く影響がなく、午前中、買い物の時間が 1 時間あった。みんなこの時間を待ち望んでいて、「略奪」という言葉で形容しても言い過ぎではないほどの勢いで友人や両親へのお土産を買いあさった。その後、僕たちの「実家」とも言える中国駐日大使館へ行った。崔天凱大使が忙しいなか会ってくれた。僕も北京語言大学の学生を代表して簡単な挨拶をした。それから座談会形式で崔大使とディスカッションを行ったが、まるで身内と昔話をしているかのように、打ち解けて楽しく話をすることができた。

午後は日本の名門大学の一つである一橋大学を訪問した。一橋大学の担当者が大学の歴史や学科、学校運営の特徴について紹介してくれた後、図書館や緑あふれるキャンパス、歴史ある建物を案内してくれた。ヨーロッパ式の上品な感じのする大学だった。

夜は一橋大学の学生たちと交流し、一緒に夕食会に参加した。彼らの博学さと独自の観点に自分の未熟さを知った。同じ世代ということでみんなすぐに仲良くなった。彼らはそれぞれ異なる目標を持ち、自分の目標に向かって努力していた。僕も見習うべきだと思った。今日は一日雨だったせいか、みんな疲れたようだった。明日はディズニーランドなので、今日はしっかり休むことにしよう。

日時：10 月 26 日（月） 8 日目
大学名：首都師範大学
氏名：邵玉珊

大使館と一橋大学では楽しく、率直に語りあうことができた。

崔大使のまとめの言葉が印象的だった。「私たちの感覚や見解は時間とともに変わるものだが、いま、私たちがこの瞬間に感じていることに間違いはない」。

今回、私たちは確かに日本経済のすごさ、国民の質や生活レベルの高さ、先進的な環境保護技術、大学生の生活などをこの目で見ることができた。これらを中国と対比してみれば、中日両国の共同の利益が容易に見えてくる。中国は日本の資金と技術を必要とし、日本は中国の市場を必要としているのだ。国民感情から言えば、両国の人々の間にわだかまりがあるわけではない。ただ、中国は日本より遅れているので、中国を理解したいと思う日本人があまり多くなく、このために多少の誤解が生まれ、メディアの報道に簡単に惑わされてしまっているだけだと思う。

中国の一時的な立ち遅れは私たちに歴史的使命を与えている。中国はすでに発展の道を歩み始め、その方向性もはっきりとしているが、最終的な目標達成のためにはなお努力が必要である。

一橋大学での座談会では、一橋大学商学院の学生たちと一緒に中国の環境保護の現状について討論した。私はちょうど石油大学の学生と同じグループだったため、中国の石油燃焼から話を始め、中国が石炭や石油の代替として新エネルギーを利用することの難しさ、コストの高さ、地域格差が大きいこと、先進的な技術が不足していることなどを説明した。同じグループの２人の日本人学生は、私たちの説明で中国がどうして有効な措置をとらずに汚染を拡大しているのかを理解したようだった。私たちは日本の技術支援を必要としている。日本もかつては汚染の道をたどって来たわけだし、すでに発展を遂げた国として途上国の環境保護活動を支援する責任があるのではないだろうか。

２人の日本人学生は中国旅行をしたときのことに言及し、中国と日本の国力はそんなに変らないと言った。そこで私たちは、人口の多さ、発展の地域的不均衡、国民の質などといった問題を指摘し、日本の人に中国の実情をもっとよく知ってほしいと話した。

懇親会の時には社会学部の学生とも交流したが、日本の大学院生はしょっちゅう視察や実地調査に行っていることを知った。学部生の頃にはアメリカへ行ってダンスコンテストに参加したこともあるという。自分もただ外国語を勉強するだけでなく、社会のことや企業についてもっと知らなければならないと思った。そうでなければ言葉だけ一人前の「外国語バカ」になってしまうような気がした。

日付：10 月 27 日　9 日目
大学名：北京語言大学
氏名：黄征

午前中に日本航空を訪問した。驚いたことに通訳は日本語学科の先輩だった。普段見られないものをたくさん見ることができた。大切な試験を諦めて日本に来ることにしたが、多くの収穫があり、「失うものがあれば、必ず得るものがある」ということが、今回よく分かった。明日で訪日団の全スケジュールが終了する。今回経験したたくさんの良い思い出をいつまでも忘れずにいたいと思う。

特に客室乗務員の訓練から学ぶことが多かった。例えばどのように接客するのか。どのようにすればお客様に不快感を与えずにすむのか。客室乗務員としての素養を身につけるために茶道まで習っているということだったが、日本文化をうまく職業訓練の中に取り込んでいるのが素晴らしいと思った。

午後はディズニーランドに行った。日本に来て、初めて思う存分遊んだ。今回の訪日のクライマックスだ。列に並んで中国では乗ったことのなかったウォータースライダーに乗った。みんな全身びしょ濡れになった。高速カメラで撮影された自分たちの写真がとても面白かった。

また好きな人と日本に来て一緒にディズニーランドで遊びたいと思った。

ホテルに戻ってからも興奮が冷めやらず、友人と買い物に行った。どんなにがんばっても手元の硬貨がなくならない。日本のお金が中国と最も違う点は硬貨が多いことだ。最も額の小さい紙幣が 1000 円。物価も高い。これでは中国人の日本への個人旅行もここ数年は流行りそうにない。ごく限られた人たちが旅行に来るだけだろう。

日付：10 月 27 日（火）9 日目
大学名：中国石油大学
氏名：趙若彤

台風一過、今日は気持ちのよい晴天だ。40 階にあるレストランに座って絵のような美しい景色を眺めながら、日本式の朝食を食べていると、ここ数日の旅の疲れがすっかりとれたような気がした。遠くに

見える富士山は高層ビルとは対照的にその神聖さが際立っていた。どんどん東京というこの都市が好きになっていく自分を感じた。明日はもうここを離れる。とても名残惜しい。このまま充実した気持ちで今回の訪日を締めくくりたいと思った。

午前中、日本航空を見学した。まず、日本航空の概況と普段よく見る飛行機の機種をいくつか紹介してもらった。その後、飛行機の基本的な飛行原理についての詳しい説明があった。説明を聞いているうちに以前学んだ物理の知識を思い出した。「学以致用（実際に応用するために学ぶ）」という言葉が身近に感じられ、人類の才智とその驚くべき創造力に感動を覚えた。

説明の後、飛行機の整備場を見学した。そこは大型飛行機が同時に 2 機収容できる大整備場だった。そこで現在建設中の滑走路や運行中の飛行機の離着陸を見ることができた。きれいに晴れ渡った空、美しい雪山、翼を広げて旋回する飛行機、そのすべてが一副の絵のようだった。羽田空港と北京や上海などの中国の都市を結ぶ便がまもなく開通されることを知り、みんな喜んだ。これも中日両国の往来がより深まったことの表れだろう。

整備場の見学が終わり、きれいな客室乗務員に案内されて乗務員の訓練施設を見学した。すべての客室乗務員は厳しい訓練を経て初めて職務に就けることを知った。服装や化粧、話す言葉や立ち居振る舞いにいたるまで、落ち着いた上品さがあった。一人の客室乗務員が言った。「笑顔の合格基準は顔の下半分の笑みを隠すことです。目だけで笑っていることが表現できたら、それが最高の笑顔です」。客室乗務員がきれいで感じがいいと感じるのは、彼女たちに真心があったからなのだ。真心があるからこそ親しみや温かみを感じることができるのだ。

今日は大好きなボーイング 747 を見ただけでなく、747 の訓練用模擬客室の中で昼食をとることができた。客室乗務員が業務中に食べるものだ。最後に案内役の客室乗務員と記念撮影をした。

午後、気持ちのよい天気の中、待ちに待ったディズニーランドに行って遊んだ。スプラッシュマウンテンやビックサンダーマウンテンではみんなの興奮が最高潮に達した。辺りが暗くなった頃、中国人が話しているのが聞こえた。突然、北京を思い出し、懐かしくなった。東京がどんなににぎやかでも、胸中の北京を忘れることはできない。今はただ大声で叫びたい。「祖国よ、もうすぐ帰ります」と。

日付：10 月 27 日（火）9 日目
大学名　首都師範大学
氏名：于阿楠

午前中、JAL を見学した。JAL は今回日本に来るときに利用した飛行機で、すでにその飛行機と乗務員のサービスを経験していたが、JAL についてもっと知りたいと思っていた。

最初に航空に関する興味深い内容の講義があった。日本航空の社員が飛行機の起源、歴史、飛行原理及び構造等のあれこれを説明してくれた。内容の濃い PPT による説明を受け、知識を得ただけでなく、最後まで興味深く講義を聞くことができた。全員多くの収穫があった。

説明が終わった後、客室乗務員と整備士の制服が着られることになり、みんな次々に着て記念撮影をとった。私も客室乗務員と整備士、機長の制服まで着てみた。制服を着ると、まるで自分が本当の乗務員になったような気がして、最高の気分だった。

その後、飛行機の整備場を見学した。ボーイング 747 があった。ちょうど整備をしているところだった。こんなに近くでよく耳にする機体を見学できてとても嬉しかった。飛行機の前で写真を撮った後、すぐに車に乗って客室乗務員訓練センターを見学した。そこは間違いなく訪日団の男子学生が最も行きたかっ

た場所であり、実は私も楽しみにしていた。きれいな客室乗務員が一体どのような訓練を受けているのかを見てみたかったからだ。

彼女たちが講義を受けている教室を見学した。教室では訓練生が先輩の講義に耳を傾けていた。飛行機の飛行知識以外にも、マナーや安全知識などいろいろなことを学ばなければならない。Make up room も見たが、客室乗務員になるのは容易ではないと思った。

訓練に使う模擬客室にやってきた。客室乗務員の先輩が訓練生に説明し、模範を示していた。訓練生が客と客室乗務員の役になって訓練していた。模擬客室内で機内食を食べた。乗務員は休憩時間にこれを食べるという。冷めていたが美味しかった。

午後、夢にまで見た Disney land に行った。7 人一組、来たことのある人がリーダーになって各アトラクションを回った。最もスリリングで刺激的なアトラクションのほぼすべてに乗った。夜、Turkey とポップコーンを食べながら山車やアニメキャラクターの賑やかなパレードを見た。Disney の真髄を堪能した。

日付：10 月 28 日（水）10 日目
大学名：北京化工大学
氏名：王越

今日は最終日だ。帰りたくない。日本に来るまでは 10 日間は長いと思っていたが、今では短すぎると感じる。日本に溶け込んで、もっと日本人と交流すべきだと思うが、時間に限りがあるのでまたの機会を待つしかない。

お昼に送別会を開いてくれた。各社の代表、東京一橋大学の学生代表、ホストファミリーなど、今回お世話になった友人たちが招かれた。ホームステイと言えば、私は 2 家族にお世話になった。初めは頼雅之さん一家のところに行ったが、頼さんの子どもが病気になってしまったために一緒にいられなくなり、急遽、結城さんの家に行くことになった。したがって今日は 2 家族に会えると思っていたが、送別会の会場に着くと、渡辺さんから頼さんは送別会に来られるが、結城さんの奥さんが体調不良で参加できないと言われた。それを聞いた私の最初の反応は “I’m so sorry to hear that” というものだった。帰国前に結城さん一家にお礼を言うことができなくなった。

送別会が間もなく始まろうとしていたとき、頼さんに会うことができた。彼は私に謝った後で、彼の一家が心を込めて準備してくれたプレゼントを私に手渡した。プレゼントの中に彼の娘さんと息子さんが書いた私宛ての手紙が入っていた。とても嬉しかった。もう少し彼たちと一緒に過ごしたいと心から思った。

送別会が終わると、車に乗って空港に向かった。搭乗前にこの 10 日間を振り返ってみた。次から次へといろいろなことが思い出され、感動が止まらなかった。親切でやさしかった随行の渡辺さん、ガイドの呂先生、そして日本のホストファミリーの温かいもてなし、心からお礼を言いたい。この 10 日間のすべてのことが頭の中をめぐり、目の前に浮かんでは消えた。一生忘れないと思う。今回の訪日のためにいといろと尽力いただいた方たちに改めてお礼を言いたいと思う。皆さんの期待にそえられるように、今回の訪日の精神を伝えつつ、これからも中日両国の青少年による友好交流のために貢献していきたいと思う。

日付：10 月 28 日（水）10 日目
大学名：中国石油大学
氏名：耿阿楠

最終日、帰りたくないという気持ちで一杯になった。忙しいスケジュールで少々疲れはしたが、とて

も充実していて、時間の経つのが遅く感じられた。でも、とうとう来るべきときが来た。今晩は北京のベッドで寝ることになる。眠れないのではないだろうか。10 日間の日本訪問による心の高ぶりは簡単にはおさまりそうにない。

送別会には各社の代表とホストファミリーが出席した。仕事の都合で私のホストファミリーの河口さん一家は参加することができなかった。みんながホストファミリーの人たちと楽しそうに話しているのを見て寂しい気持ちになった。渡辺さんが私の名前を呼んで慌てた様子でそばに来た。河口さんに頼まれたという彼の同僚が、この 2 日間に撮った写真を届けてくれたという。中に家族全員からの手紙が入っていた。急いで手紙の封を開けた。涙で目がくもった。2 日間の日本の家庭での思い出が次々に思い出された。この 2 日間に培った情は断ちがたく、心からもう一度会いたいと思った。これからも世界が平和で、一般市民が自由に行き来できますようにと願わずにはいられなかった。

日付：10 月 28 日（水）10 日目
大学名：首都師範大学
氏名：謝黙超

交流、理解と調和

一つの国、一つの民族を理解するのに 10 日間はあまりにも短すぎるが、多くのことを変え、一つの国をあらためて理解するのには、10 日間は十分な時間だと思った。

今回の訪問で日本の一般人との交流を通じて思ったことは、日本人の意識中の中国は 10 年前、もしかしたら 20 年前のままであり、多くの偏見と誤解はすべて中国文化の理解不足から生じているということだった。じっくりと経験しなければならないことは山ほどある。その意味で今回の訪日はめったにない機会だったと言える。

インターネットの発達した今日だからこそ、こうした小規模の団体旅行が予想もしなかったような効果を生むのかもしれない。

このようなチャンスを与えてもらった中国日本商会、日中経済協会、中日友好協会に感謝すると同時に、佐藤さん一家の心のこもったもてなしにお礼を言いたい。今後もこのような活動を続けてほしいと思う。中国の学生が日本に行くというだけでなく、日本の若者も中国に来てはどうだろうか。中国にも日本の若者がいろいろと経験し、伝えるべきことはたくさんあるのかもしれないのだから。